

沖縄文化研究所

I 2018年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2018年度大学評価結果総評】(参考)

沖縄文化研究所は厳しい財政状況が続く中、社会的責任と期待によく応え、定期刊行物の発行や講座開催などの恒常的な活動に加え、蔵書の受け入れやフォーラムへの協力など、活発な活動を展開し、十分な評価に値する。任期付ではあるが所員の2名体制は可能性を広げるものとして肯定的に捉えたいところである。2016年度から設置された内部質保証委員会を中心として、今後はHPの充実を図るなど研究所の訴求力を上げ、その上で各種外部資金の獲得に向けて戦略を練るなど、さらなる努力が期待される。また組織としての在り方を客観的な視座で点検・評価を行う第三者評価を導入し、より厳格なPDCAサイクルの実現を図られたい。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

昨年度の自己点検・評価において記述した2017年度の自己点検・評価に関する文言が、2018年度もほぼそのまま該当した現状にかなり失望し、研究所全体が疲弊しているとの感を深く自覚せざるを得ない。敢えてその文言をここに再掲することはしないが、研究所活動の基盤となる事務体制の強化が一向に進展しない状況への危機感をぜひ理解してほしい。とはいえ、2018年度も研究所経常経費のかなりの部分をそうした事務体制の維持に割かなくてはならなかった状況は、2019年度にはほとんど解消される見込みである。これを一筋の光明として、研究所としてたえざる努力を続けるつもりである。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

「研究所全体が疲弊しているとの感」との自己点検・評価シートの記述に比すれば、公開授業・イベント型の諸活動については一定程度以上の集客もあることから、研究所の活動の成果が認められる。また、研究所経常経費を事務体制の維持に割かねばならない状況が2019年度にはほとんど解消される見込みとのことであるため、沖縄文化研究所の基盤をなす活動の一つである、貴重な学術資料等の整理と公開が、今後着実に進捗していくことを期待したい。2018年度大学評価結果総評で指摘されたいくつかの事項（HPの充実、厳格なPDCAサイクルの実現等）に対する対応が記述されていないが、例えばHPの充実については、他の関連学協会へのリンクを張るなど、比較的簡易に低コストでできるところから準備することを運営委員会等で検討されたい。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2019年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2018年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2018年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

- ・2018年度春・秋・両学期 オムニバス形式の総合講座「沖縄を考える」(L.A. 授業科目)を開催。受講学生春学期約100名、秋学期約240名。一般受講者は各回平均で約70名であった。
- ・沖縄文化研究所の前身であった沖縄資料センターの資料収集実務等に長く携わり、当研究所にも多大な貢献をされた新崎盛暉氏が、2018年3月末逝去された。同氏は沖縄大学学長や同大学教授を務めるなど、沖縄近現代史に関わる膨大かつ広範な影響力をもつ業績を築き上げられた。その業績を振り返り引き継ぐという趣旨のシンポジウムを、2019年3月開催した。当日は100名を越える参加者が集まり、盛況のうちに会を終えた。
- ・2019年3月、研究所の特別企画集会として「琉球古典音楽の世界」を開催し、琉球音楽の二大流派である安富祖流と野村流の三線と島唄の実演を交えて、両流派のもつ特徴と相違点などを学術的に検討・確認した。約70名の参加者があった。
- ・2018年度沖縄文化協会・定例研究発表大会を法政大学で開催発表者約20名、参加者約80名があった。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「新崎盛暉さんの業績を振り返り引き継ぐ会」については、琉球新報紙にその挙行の様子が記事として掲載された。

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

※2018年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を簡条書きで記入。

以下の定期刊行物を刊行した。

- ・『沖縄文化研究』（研究所紀要）第46号 発刊
- ・『琉球の方言』第43号 発刊
- ・『沖縄文化研究所所報』第83号、第84号 発刊

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・上記はいずれも、研究所開架図書室に配架し利用者の閲覧に供されている。

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して2018年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2018年度特になし。これらの文献等の引用実績等については研究所としてそれらを収集しているわけではない。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし。

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2018年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

恒例となった「沖縄学研究機関所長会議」が2018年7月28日に沖縄・那覇市で沖縄大学を幹事校として開催され、本研究所を含めて7大学の研究所長が参集。相互に活動状況などを報告し情報交換を行なった。法政大学沖縄文化研究所についてはおおむね好評で、「本土唯一の」存在としての充実した活動への期待が表明された。

また本研究所では客員研究員というカテゴリーを設けて国外在住の沖縄研究者20名をそれに委嘱し、国際的な研究交流を図ってきており、例えばハワイ大学図書館などとの提携も含めてその活動に高い評価を受けてきている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし。

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2018年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および2017年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。

- ・特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	1. 1①

【この基準の大学評価】

市ヶ谷リベラルアーツセンター（公開）総合科目、「沖縄を考えるA/B」（春・秋）の開催については、本学学生のほか一般からの多くの受講者があり、研究所の研究成果を学内外への教育に還元する取り組みとして評価できる。2019年6月時点での当該科目のシラバスでは多くの講義予定が未定となっているものの、これは外部の研究者を招聘して行う授業形式をとっておりゲストスピーカーの手配等に時間を要するためであり、沖縄文化研究所のウェブサイトにも各回ごとの詳細が示され、シラバスにリンクも貼られているため、実質的な問題はないことが確認できた。2019年3月に開催した「新崎盛暉さんの業績を振り返り引き継ぐ会（2019年3月16日）」は沖縄大学・沖縄タイムス社・琉球新報社の後援を受けて開催され、対外的な活動の一つに挙げられる。その他、「琉球古典音楽の世界：新垣亘『琉球古典音楽の世界安富祖流の研究』出版記念講演会（2019年3月29日）」の奄美シマウタ研究会と連名での開催や「沖縄文化協会・定例研究発表大会（2018

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

年 9 月 29 日)」の開催にも注力しており、成果が見られる。外部組織からの評価については、「沖縄学研究機関所長会議」の場などを利用する形で行われている。科研費獲得については、採択に向けて継続した応募を期待する。

III 2018 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動							
1	中期目標	人文・社会の 2 つの研究プロジェクトが毎年、研究成果を刊行する研究体制をつくる。研究のための外部資金を確保する。収集・受け入れの進んだ研究上の貴重文献や各種コレクションの整理を進め、閲覧可能な形にして提供するとともに、HP などによるデジタルアーカイブ化を進める。また各種定期刊行物の発刊に努める。							
	年度目標	尚家文書及び楚南家文書の目録化と文書自体の配列の整理に着手する。定期刊行物を予算面での可能性を勘案しながら遅滞なく刊行する。							
	達成指標	刊行物の年度内発行を確保する。							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>刊行物については、準備していた「叢書」が出版社の都合により翌年に回さざるを得なくなったが、それ以外は刊行できた。とくに「沖縄文化研究」には今年度も 17 件の投稿があり、査読の結果、その半数弱を掲載した第 46 号を刊行した。また、受入れた寄贈資料の整理は可能な限り進めてきたが、尚家文書などの大型資料についてはなかなか進捗がみられなかった。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>文書資料の整理・活用に必要な人的・予算的な面の充実が、目標達成のための必須要件である。</td> </tr> </tbody> </table>	執行部による点検・評価		自己評価	A	理由	刊行物については、準備していた「叢書」が出版社の都合により翌年に回さざるを得なくなったが、それ以外は刊行できた。とくに「沖縄文化研究」には今年度も 17 件の投稿があり、査読の結果、その半数弱を掲載した第 46 号を刊行した。また、受入れた寄贈資料の整理は可能な限り進めてきたが、尚家文書などの大型資料についてはなかなか進捗がみられなかった。	改善策
執行部による点検・評価									
自己評価	A								
理由	刊行物については、準備していた「叢書」が出版社の都合により翌年に回さざるを得なくなったが、それ以外は刊行できた。とくに「沖縄文化研究」には今年度も 17 件の投稿があり、査読の結果、その半数弱を掲載した第 46 号を刊行した。また、受入れた寄贈資料の整理は可能な限り進めてきたが、尚家文書などの大型資料についてはなかなか進捗がみられなかった。								
改善策	文書資料の整理・活用に必要な人的・予算的な面の充実が、目標達成のための必須要件である。								
No	評価基準	社会連携・社会貢献							
2	中期目標	総合講座「沖縄を考える」への社会人の参加を広げる。沖縄の現状等に関するシンポジウム、講演会等を定期化する。							
	年度目標	総合講座を予定通り実施すること。また共催依頼のあるいくつかのシンポジウムを実施する。							
	達成指標	総合講座については、一般社会人の聴講を 80 名程度に増加させる。また広義の沖縄問題にかかわるシンポジウムを開催する。							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">教授会執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>総合講座（IA 科目。一般にも無料で開放）は予定通り遂行された。毎回様々な講師によるバラエティに富んだ講義が行なわれ、各回のテーマにより多少の出入りはあるものの目標とした一般社会人の聴講者 80 名という数字は、平均的にみて達成された。また法政ミュージアム開設準備委員会にも、専任所員（大里）が積極的に参加し、分科会での具体的な議論にも加わり貢献した。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </tbody> </table>	教授会執行部による点検・評価		自己評価	A	理由	総合講座（IA 科目。一般にも無料で開放）は予定通り遂行された。毎回様々な講師によるバラエティに富んだ講義が行なわれ、各回のテーマにより多少の出入りはあるものの目標とした一般社会人の聴講者 80 名という数字は、平均的にみて達成された。また法政ミュージアム開設準備委員会にも、専任所員（大里）が積極的に参加し、分科会での具体的な議論にも加わり貢献した。	改善策
教授会執行部による点検・評価									
自己評価	A								
理由	総合講座（IA 科目。一般にも無料で開放）は予定通り遂行された。毎回様々な講師によるバラエティに富んだ講義が行なわれ、各回のテーマにより多少の出入りはあるものの目標とした一般社会人の聴講者 80 名という数字は、平均的にみて達成された。また法政ミュージアム開設準備委員会にも、専任所員（大里）が積極的に参加し、分科会での具体的な議論にも加わり貢献した。								
改善策	—								

【重点目標】

本研究所の研究活動の中心である各種定期刊行物の刊行を遅滞なく進める。
運営委員会内に設ける編集委員会の活動を活発化させ、査読制の実質を充実させることを通じての、学術活動の質的レベルの維持・向上に努める。

【年度目標達成状況総括】

研究所経常予算のうちの相当額を事務職員（非正規雇用）の件費に充当しなくてはならないという窮状の中で、専任所員や事務職員の献身的な尽力によりここ数年の研究活動のレベルを維持することはできた。しかし、こうした状況はいつまでも継続できるとは思われない。

【2018 年度目標の達成状況に関する大学評価】

「研究活動」「社会連携・社会貢献」とともに、達成指標に照らして、年度目標はほぼ達成されたと評価できる。一部の刊行物については出版社側の諸事情も絡むため、スケジュール通りに進まなかったことはやむをえない。研究所紀要『沖縄文化研究』については、投稿が活発な状況と、査読プロセスにより一定の質を確保していると推察され、その点について評価できる。ILAC 総合科目として提供している 2 つの授業「沖縄を考える A/B」における一般社会人の聴講者数を見ると、

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

社会貢献面についても A 評価は妥当であると判断できる。本講義の準備にかかる労力や講師への謝礼等、研究所としての苦労も推察されるが、今後も継続されることを期待する。法政ミュージアム開設への貢献が実ること併せて期待する。

IV 2019 年度中期・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	人文・社会の 2 つの研究プロジェクトが毎年、研究成果を刊行する研究体制をつくる。研究のための外部資金を確保する。収集・受け入れの進んだ研究上の貴重文献や各種コレクションの整理を進め、閲覧可能な形にして提供するとともに、HP などによるデジタルアーカイブ化を進める。また各種定期刊行物の発刊に努める。
	年度目標	尚家文書及び楚南家文書の目録化と文書自体の配列の整理に着手する。定期刊行物を予算面での可能性を勘案しながら遅滞なく刊行する。
	達成指標	各種定期刊行物の年度内発行を確保する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	総合講座「沖縄を考える」への社会人の参加を広げる。沖縄の現状等に関するシンポジウム、講演会等を定期化する。
	年度目標	総合講座については、一般社会人の聴講を 80 名程度に増加させる。また広義の沖縄問題にかかわるシンポジウムを開催する。
	達成指標	総合講座を予定通り実施すること。また共催依頼のあるいくつかのシンポジウムを実施すること。
【重点目標】		
収集・受け入れの進んだ各種コレクションや研究上の貴重文献・資料の整理を進め、閲覧等が可能な形にして提供するとともに、それらを用いた研究プロジェクトを構想する。		

【2019 年度中期・年度目標に関する大学評価】

「研究活動」「社会連携・社会貢献」の両評価項目ともに、年度目標の設定は中期目標に沿うものである。前者の研究活動については、諸資料・文書の整理の開始および定期刊行物の遅滞ない刊行という形で年度目標が設定されていることは、適切かつ具体的である。後者の社会貢献面については、継続的活動（ILAC 公開総合科目の主催）に加え、他学協会との共催によるイベント等の実施について、割きうる労力の上限を見極めながら進めることを期待する。上記のいずれも具体性をもつ目標・達成指標である。また、重点目標に挙げた各種コレクションの整理・デジタル化等の方策については、費用の発生も見込まれるため、外部資金等の獲得に引き続きの注力が望まれる。

【大学評価総評】

専任所員が 1 名から 2 名（任期付）の運営体制となったことによる諸事情の変化について注視しながら、沖縄文化研究所が在京の貴重な研究施設であることを生かした情報発信・教育研究を今後も推進することが求められる。自己点検・評価の手段については内部質保証委員会が設置されているが、そういった活動を広く周知することも重要であろう。例えば、現在のウェブページには運営委員の氏名・所属等が公開されているが、併せて、運営組織図等を掲載するなどの方策も考えられる。

平素の研究活動については各所員（専任・兼任・兼担ほか）の実績に負うところが大きく、特に専任所員以外の構成員については、各所属の業務・諸活動もあるため、当研究所の活動に従来以上に注力することは困難な場合も多いと考えられる。しかしながら、重点目標に掲げている、貴重文献の整理とそれらを閲覧可能な状態に整える作業については、2 名体制になった専任所員（任期付）だけでは達成困難と推察される。これに対しては、併せて重点目標に掲げている、研究プロジェクトの構想と立ち上げに全所員の協力を得て、そのプロジェクトを科研費等の外部資金の獲得にも繋げていくことを期待したい。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。